

5

フジテレビ



箕輪幸人（みのわ ゆきと）

震災当時：株式会社フジテレビジョン報道局長（調査当時：
常務取締役報道局長兼解説委員長）

茨城県出身、60歳。早稲田大を卒業してフジテレビ入社。
報道局社会部で司法・警視庁両記者クラブキャップ、社
会部長を経て解説委員、報道局長、常務取締役報道局長
兼解説委員長を経て2014年4月からテレビ新広島代表
取締役社長。

陪席 植村綾 企業広報シニアマネージャー（調査当時）

□ インタビュー実施

2014年4月25日（金曜日）午前10時半～12時
東京都港区台場 フジテレビ本社報道局応接室にて
聞き手：林香里、奥村信幸、五十嵐浩司

□ インタビューの要点

■在京の放送局間で、各局のヘリコプターのうち1機を交代で茨城県つくば市に待機させ、関東地方が津波に襲われたりして新木場や羽田の発着ができなくなった際に、プールで映像をシェアするという話がまとまった。

■全国のネットワーク局全体で3・11の記憶や教訓を伝えるためにニュースに載せていくことに苦勞している。「視聴率を見ると、3月11日の特番というのは被災地から遠くなるほど悪くなっていくんですよ」。

■福島第一原発の最初の爆発を確認して、FNN（フジテレビ系列）の取材陣には「40キロ以上離れる」と指示。「これはもう運動神経」。安全が確認できない中でスタッフを行かせるわけにはいかなかった。

□ インタビュー後記

足かけ3年にわたるインタビューの皮切りのインタビューであった。まだ復興のありかたや、福島第一原発の除染などの問題が報道を賑わせていた時点での依頼だったため、各社が「まだ現在進行形の問題」などと消極的な対応をとる中で、ヒアリングに応じ、ざっくばらんに内情を明かしてくれたことに敬意を表したい。

民放のニュースネットワークが、程度の差こそあれ共有する構造的な問題が明らかになった。被災地周辺のローカル局の圧倒的なマンパワー不足を補うためにネットワーク局を総動員し、穴を埋めていく態勢を継続していく苦勞、震災の教訓を全国のネットワークで共有していくために、報道だけでなく他部署も動員して番組編成を考えて行く戦略、ニュースの検証だけでなく、取材陣の安全を確保するためにも原子力の専門知識を持った記者が複数必要だったという反省は共有しているものの、専従の記者は平時に維持は難しいスタッフの台所事情などが率直に明かされたと言う意味で非常に貴重な証言である。

(奥村信幸)

—— 3・11の経験によって、フジテレビやFNN系列の組織改編や災害対応の改善など具体的にあったか。

箕輪 フジテレビ系列ですと、全国を北海道・東北、中部、近畿・中四国、それと九州・沖縄ブロックと、4つのブロックにわけて、このブロックごとに災害放送対策訓練を実施しています。とくに各社間の連携に重点をおいています。

—— 何回ぐらい実施されたか。

箕輪 3・11東日本大震災以降は少なくともブロックごとには年に4回ぐらいやってるはずです。また大規模なFNN防災訓練を年に一回実施しています。

—— 具体的には？

箕輪 たとえば、南海トラフを震源地とする地震が発生したことを想定して、各ブロックから被災を受けたテレビ局への応援態勢を構築していくことを中心にすすめて行いました。ヘリコプターを実際に飛ばしたり、中継をやったりとかですね。

—— 動線のマニュアルも作成した？

箕輪 それは各ブロックごとに作ってもらいました。地理的なことは地元の方がよくわかっていますから。

—— 東日本大震災の後に作成した？

箕輪 後です。

—— 阪神淡路大震災の際にできたマニュアルも？

箕輪 あります。

—— 今回はそれを改訂したのか？

箕輪 改訂したわけですが、でも実質的には新しいものを作ったという印象ですよ。東北地方であれだけ大規模な災害が起きるということを我々は想定していなかったですから。訓練で重点をおいたのは、ヘリコプターと中継車との連携でした。同じテレビ局のヘリコプターと中継車だったら、リンクするのは簡単なんです。いつもやっていますから。ただ、会社が違う同士でヘリコプターと中継車との連携は技術的にも難しいところがあって、それをスムーズに行うことができるように何度も繰り返し行いました。またこういう訓練を行うことで、どこで災害が起きても対応できるようになります。応援態勢をどう組むかについても、今一つ一つ作っているところです。

—— なるほど。

箕輪 あと、フジテレビ系列の場合、大分と宮崎というのは、クロス局（地上波ローカル局で、複数の系列に属する放送局）なんですよ。大分はうちと日本テレビとのクロス。宮崎はそれにテレビ朝日が入った3局クロスです。となると、地元局はフジテレビのためにだけニュースを流すわけにはいかないですよ。だからフジテレビとしては、地元局が放送しているものをタイミングをみて、全国放送したりできるように、“飛び乗り、飛び降り”の訓練も行いました。

—— 系列としては、他のキー局との連携の体制も考えている？

箕輪 クロス局の場合は他のキー局と一緒に話をしないとできあがらないと思います。フジテレビだけのことを考えていると、他局にとってはのめないこともあるからです。

—— キー局どうしてつくばにヘリコプターを手配し合うなどもあったと聞くが？

箕輪 あれもですね、東日本大震災の教訓なんですよ。最初はフジテレビだけでやろうと思ったんです。うちは新木場と羽田にヘリポート持ってまして、両方とも大きな津波が来たら被災する可能性があるんですね。実際、東日本大震災のときは仙台放送のヘリコプターは津波に流されてしまいました。でも会社独自でやろうと思ったら、かなり費用がかかるんですよ。というので、他のキー局の報道幹部の人たちに、「こういうこと考えてるんだけど、一緒にやらない？」っていうことで、一年間ぐらい会議を開いて検討し、すでに場所も選定しました。

—— フジテレビがリーダーシップを？

箕輪 私と、TBSの当時の役員の方とで雑談している中で出てきた話です。当初はフジテレビ独自にやろうと思ってましたから、どれくらいかかるのか試算もしてましてね。そういう数字をみんなに示して検討してもらいました。具体的には、例えば1週間とか1か月交代で、どこか1社のヘリを津波の心配がいらなくなるころに移して、もし津波によって各社のヘリが被災をしたら、災害を免れたヘリが撮影した映像を各社で分配しようと考えました。いわゆる代表映像という考え方です。これで発生直後の映像を放送して、住民に避難を呼び掛けようと考えました。ただこの代表映像という仕組みも、時間の経過とともに、各キー局とも地方局からの応援が来ますから、応援が来たらそこで解除して、各社がそれぞれの視点からの取材をしよう。

—— それぞれの応援が来るまでは連携する、ということか。

箕輪 ええ。

—— 系列局の中でも、例えば、広域災害の、想定されている南海トラフ巨大地震の場合も、リーダーシップはやはりフジか。

箕輪 フジですね。

—— ローカル局の人には「フジのキー局なんかには従わない」という声あるというが、広域災害の際にフジがリーダーシップをとるコンセンサスは系列内ではできている？

箕輪 昔は、東京と大阪との間はじっくりいっていなかったように思います。ただ、それは双方に話をしようと言う歩み寄る気持ちがなかったからで、基本的には報道の使命は何かという点では一致していましたから、じっくりと話し合う中で理解しあえるようになりました。時間はかかったんですけども、今うちの系列は一つになれたと思っています。

—— 人事交流は非常に重要と思うが、災害を念頭に置いた人事交流もあるか。

箕輪 被災地での会議は積極的に行いました。2011年の5月、まだ福島原発事故の関係で福島県への観光客がほとんどなかったときに、市内からちょっと離れてますけれども、飯坂温泉のホテルで全国の報道部長会議を開きました。全国の報道部長に自分の目で被災地を見てほしいと思ったからです。

—— 震災をきっかけに交流が活性化している？

箕輪 その後は、被災3県で部長会を開いたり、局長会を開いたり、デスク会も開いています。今も

続いています。

—— では常置カメラの設置など、全国各地の設備の見直しについては？

箕輪 各社で、情報カメラの見直しを行っています。地盤の弱いところに設置すると情報カメラも被災してしまいますから、撮影場所だけではなく設置場所についても検討をしてもらっています。それと、その情報カメラをすべて東京で集約できるようなシステムを今、作ってます。もうほぼ完成してるところです。

—— それも、震災の教訓か。

箕輪 ええ。地方局の場合、泊り勤務者がいないところが少なくないので、深夜早朝の発生時に、迅速に対応するためです。

—— カメラ設置には力を入れているのか？

箕輪 ええ。弊社は海の近くにありますが、万一津波が襲ってきたときも想定して対策を練っています。たとえば、津波によって本社から放送をすることができなかった場合にどうするか、ということです。今考えているのは、新宿にある支局にスタジオを作って、そこから大阪へ向けて映像を送り、大阪の関西テレビから全国へ向けて発信してもらうシステムを作りました。

—— ロケーションがここ [臨海副都心で埋め立て地のお台場] では危機感があるか。

箕輪 電源がある地下の部分の耐水性を高める工事を行っても、それで絶対とはいえません。懸念があるのなら、それを払拭する形で考えようと言うのが根底にありました。そこで新宿支局の有効利用をということになったわけで、実際に支局のスタジオをつかって訓練も実施しています。災害報道をしていて感じるのは、被災地と被災地から遠く離れた地域との温度差です。発生から時間がたつにしたがって、温度差が広がっていくように感じました。どうやって一体感を保っていくのか、正直言って自分の無力さを感じてなりませんでした。

—— どのような困難があるか。

箕輪 たとえば、他の系列が通常のローカルニュースやってる時に、フジ系列だけは被災地のニュースだけやってるというのは、発生から1か月ぐらいがすぎると理解してもらえなくなる。

—— 震災から日が経つにつれて、北海道、九州など被災地から離れたところから、被災地報道ではなくローカルニュースに戻っていったのか。

箕輪 [系列局間で] 日を決めて大震災前の通常 [の番組編成] の形に戻しました。東京はずっと被災地のニュースをとりあげているので、その部分を取りたい (自局でも放送したい) 局はそうしても構いませんよと。

—— 記者たちのケアについては？ 過酷取材が続いたが、遺体を見たショックなどへの配慮や、被災された方との交流やコミュニケーション、取材において記者自身に求められる倫理、さらにはデスクや直属の上司が記者たちをどのぐらい働かせてよいかとか、心のケアをどうするか、などについて報道局の方針は？

箕輪 発生の当日はもう、勢いで仕事しましたが、結局、2日目以降はローテーション組んで対応しました。同時に全国のフジテレビ系列のテレビ局から被災地取材に向かってもらいました。現地

取材にあたった記者やカメラマンの心のケアの問題では、フジテレビの場合は社内に健康相談室がありますから、そこには上司の了解を取ることなく自由に行ってもらいました。それから、原発関連でいえば、東海村のJCOの事故の以降に、原発の取材マニュアルを改訂して、現地で取材した人間には、取材後東京に戻ってきた段階で必ず病院で健康診断を受けてもらうようにしました。もちろん会社の負担で社員も関係会社の人も扱いは同じです。

—— 非常につらい経験をされた方とのインタビューなどは、通常の取材でもありうることだとは思いますが、記者の心得などを点検することはあったか？

箕輪 そうですね……。実質的に相談を受ければそういうアドバイスはしたんでしょうけれども、そういう事例として私のところにあがったことは無かったですね。

—— 例えば、避難所ですごしている人々はカメラに映さない、といった配慮の徹底などは？

箕輪 あ、それはですね、阪神淡路大震災の時の経験則があったので、そういうのはマニュアルとしてあります。避難所の中は同意を得てから撮るようにしよう、とかですね、そういうのはあります。

—— そうした方針は先ほど話に出た「マニュアル」に含まれているのか。

箕輪 南海トラフ地震にむけたものは、訓練の実施要項ですから、[南海トラフに特化した対応としては] そこには入っていません。一般論としての地震取材マニュアルに書いてあります。実際に避難所の取材をしてみると、やっぱりケースバイケースですよ。最初は中の取材を許してくれた人が、ある時から我々を拒むようになってきますので。だから現場の記者やカメラマンには、決して無理強いをするなど指示していました。

—— 個人情報の扱いなどは、通常の事故の取材と同じか。

箕輪 同じですね。

—— 原発取材マニュアルは、普通のマニュアルと別に？

箕輪 別に作ってます。

JCO事故以前にもあったのですが、実際に取材をしてマニュアルの足りないところが明らかになったので、事故のあとに改訂版を出しています。

—— JCO事故の場合に立ち入り制限されたゾーンなどでは、何キロ圏以内の被ばく量とか、今回とは[数値は] かなり違いますよね。

箕輪 まったく違いますよ。

—— 従来マニュアルの基準に従ってるとどこも行けないという声も他社の記者たちから聞いたが、どう判断したか。

箕輪 正直言って私は行かせませんでした。最初の水蒸気爆発、ちょうど福島中央テレビの情報カメラによる映像が放送されるのを見ていました。あの瞬間、現地にいる取材班には撤退を命じました。

「40 キロ離れろ」って言ったんですよ。今現場にいる連中がどういう状況にいるか分からなかった。だから 40 キロ離れば、どんな風向きであっても大丈夫だろうと思ったんです。それと、建物の中に避難するという手もあったかもしれませんが、地理に不案内のところでは建物を探すだけでも右往左往するでしょうから、とりあえず現地には一斉指令で 40 キロ離れろと指示しました。

—— 現地に入っている記者さんたちがいたのか。

箕輪 ええ、いました。あの近くにいましたから。

—— 3月12日の爆発時に「離れろ」と指示したあと、記者たちはどうだったんですか、結局。

箕輪 それは、離れましたよ。

—— 原発事故後にメディア企業が「40キロ離れろ」と指示したことに対して、フリーランスのジャーナリストたちからは非常に強い非難があったが、それについては？

箕輪 組織の長としては、正直言って、部下の安全というものをまず確保することが自分の仕事だと思いました。もしマスコミだったら誰かが残れるべきだと言われるんだったら、私が行きますよ。私が現場に行って取材するんだっただのならばともかく、私よりも下の者を現場に残して取材させるっていうのは、安全が確保できていない以上、やらせるわけにはいきませんでした。あのときは線量計だって十分にはなかった。もしあれば、また別の考えがあったかもしれませんが、現場の取材班はあまりにも無防備だった。

—— その規範に縛られずに突入したフリーランスの取材者たちに対して、一部の人々からは「この人たちこそジャーナリストだ」という強い支持があった。「ジャーナリズム」という観点からはどう感じるか。

箕輪 雲仙普賢岳が噴火して火砕流で取材中の記者やカメラマン、それに消防団員などの人たちが亡くなったことがありました。あのとき生き残った消防団の人や記者の話をあともどめたものを読んだら、記者は消防団の人がいるからここは安全だと思ったと。消防団は消防団で、記者がいるから安全だと思ったと話している。我々の存在がもしかしたら本来逃げなきゃいけないときに、住民に間違ったイメージを与えるんじゃないかっていうのが頭をよぎりました。少なくとも現時点で安全なのかどうかも分からない、40キロ離れろという指示を出すときの判断根拠の一つに、住民に誤解を与えてはならないという意識が強くありました。

—— 管理職は行かせるといった判断なども無く、全員撤退した？

箕輪 その時は、ええ。とりあえずは一回下げる。で、何が起きたかを確認してからだと。

—— その後改めて現地に入っていくのはいつ頃か？

箕輪 これはですね、だんだん放射線量が減ってきたというのをつかんで——だから、警察が中へ入って遺体の捜索とかやりましたよね。防護服着て。ああいうのに付いて行きましたよ。ただ、付いて行くときに言ったのは、「社員を行かせろ」と。つまり、外部のプロダクションの人じゃなくて、絶対に社員が行けと。現地取材に行ったのは福島テレビとフジテレビでしたね。福島テレビは責任取材エリアでおきた事故だから当事者意識が強かった。そして、我々フジテレビもFNN系列のリーダーとして現地取材にあたりました。

—— その時に防護服を着て取材に入ったのは、管理職とか、50歳以上、という人選があったか。

箕輪 デスククラスで——50歳以上とかそういうことは考えなかったですね。ただ、本人の同意を必ず取る。嫌といったやつは行かせると。それだけは徹底しろと言ったんです。

—— 規約や文書でということではなく、口約束で？

箕輪 ええ。口約束です。その後も、福島に応援を——出してるんですけども、当初は女性の中に「行きたくない」っていう人もいます。その気持ちはわかるので、行かせなくていいって言ったんです。だからといって、人事上、不公平な扱いもするなど。人はそれぞれいろいろな事情を抱えているわけで、それを汲んであげないと。

—— 様々な判断をする必要があった。

箕輪 いやあ、運動神経でしたよ、正直なところ。あの爆発した映像を見た瞬間は、周りから現地の取材班をどうします、聞かれますでしょ。上と相談する時間もなかったのもう「引け」って。

—— その経験を生かしてマニュアルの再整備をしよう、と？

箕輪 数値が下がっていくのをみながら、対応を考えるものを作った方が良いと考え、すぐに改訂作業を始めました。福島への取材応援は廃炉までを考えると、かなりの長い期間になる。そこで原発取材だけに特化したチームを作った。これも、各局の了承がなければできないし、何より取材の覚悟がなければできないわけで、チームに参加してもらった系列各局や応援取材に手を上げてくれた人たちには感謝している。

—— 福島第一に特化した取材チームを編成したのか。

箕輪 そうです。ですから取材の内容は東電の会見だったり、県の会見だったり、すべて原発に特化したものです。

—— 専門家も含まれている？

箕輪 チーム内に専門家はいませんが、原発立地県の記者は他の地域の記者よりも知識はありますし、2か月にいっぺんぐらい、専門家を呼んでの勉強会を行うなどして、レベルアップをはかっています。

—— そのチームのメンバーたちは今も福島に？

箕輪 各局別に行ってますから。今はどこ [の局] なんだろう、関西テレビかな、順番で言えば。

植村 1週間ぐらい。

—— その人達は四六時中、原発取材に特化しているのではなくて、通常業務もやりつつ、常に原発を意識し続ける、マインドをもって、という位置づけか。

箕輪 ハイ、ただ通常業務に戻ってしまうと、福島情報を自分で得ることは難しいので、東電の会見をメモにして、全メンバーに送り情報の共有化を行っています。さらに、2～3か月に一度、メンバーを集めての勉強会を開いています。

—— オンラインでの研究会？

箕輪 ええ、そうです。

—— 各地のメンバーがネットワークで繋がっていて、勉強会の情報があれば行ける人は行く、というスタイルで。

箕輪 今年 [2014年] の1月に結成して、4月にスタートしたんです。

やっぱり、地方局からすると、記者やカメラマンを他の地域に応援にだすのは負担なんです。短い期間とはいえ人がいなくなるわけですから。そうすると、これまでのように単に「福島だけの応援です」っていうんじゃ、理解を得るのは難しくなる。そこで福島第一原発の廃炉までの道筋は30年か

ら 40 年かかる。その長い期間の取材を FNN 全体で支えるんだ、と問題を特化して説得しました。原発立地県の人たちに対しては、この問題は当然自分の問題として対応すべきだし、周辺地域だって同じような被害があった時に取材に役に立つだろうという形で説明をしました。

—— そのチームのヘッドはどこに？

箕輪 ヘッドは福島テレビ。

—— 福島テレビの担当者は、原発専門というわけではない？ 地元だからか。

箕輪 やっぱり、ずっとこの間勉強してますから、彼らは知識はそれなりに備わってますよ。何より使命感がある。これが大きい。

—— フジテレビには、原発とか原子力の知識のある工学部出身の記者などはいるのか。

箕輪 います。

—— 原発事故対応のできる人材と採用したのか。

箕輪 いや、偶然です。事故以降は、その人物にはこれだけやらせてます。まだ 35~6 歳じゃないかな。東大の理科系出身なんですけれども、やっぱり数字に対する親近感が違いますよ、私たちとは(笑)。私は会見の席で数字が出た瞬間、機能が停止しますけど。非常に理論的にももの考えることができる局員です。

—— 原発取材チームにも入っているか。

箕輪 入ってます。

—— 彼のポジションには何か役名はついている？

箕輪 社会部の記者です。通常の記者業務と平行して。1 人 2 役は当たり前だと思います。

—— 普段は遊軍で取材をさせている？

箕輪 そうです。

—— 事前の勉強などの仕込みはけっこうやらないとダメな分野だが、仕込みばかりやらせると今度は報道の感性が鈍る。どうバランスをとるか

箕輪 東電の会見とか、行政の会見が東京であったときは彼が中心で原稿をまとめているのでそこは大丈夫だと思ってます。

—— 例えば今回の福一の事故みたいなのが起きると長丁場になるがいま担当している彼一人でじゅうぶんだと思うか。それとも、何年かかけて育てていくべきだと……。

箕輪 はい、だからこれは、専門記者人材を作るための専門チームでもあるわけです。

—— 原子力に限らず、STAP 細胞とか、いろいろ理系の問題が話題になっているが、新規採用の学生を判断する際に、そういう点では意識はありますか。

箕輪 多少はありますが、絶対ではないです。結局中に入ってきた人間を育てていくしかないと思うんですよね。

—— 報道局というと現在メンバーは何人ぐらいか。

箕輪 社員が 200、それから外部のプロダクションの方が 180~90。

—— 全体で 400 弱ぐらい。

箕輪 はい。

—— その報道局新規採用は、年30人とか40人ぐらいか

箕輪 そうです。いまうちで、30弱ぐらいですか。

植村 そんなにないです。今度の新入社員は25人ぐらいで、そのうち報道に来るのが――。

箕輪 3～4人。

—— 3～4人の採用の3分の1が原発担当、というのは難しい。

箕輪 難しいですね。

—— 報道で採用されも、一生報道というわけじゃない。

箕輪 ないですけども、私はずっと報道なんですけどね。本人の希望さえあればずっと居残れますから。うちの人事制度的には

植村 ドラマとかそういうところから異動して来たりする人もいますしね。

—— 取材のほかにも原子力マニュアルの改定などで密接に連携を取る原子力や放射線関連の専門家はいるか？ その人選や、その方の見方に一応依存しようと決めた際の基準は？

箕輪 もんじゅの事故後にフジテレビ専属の専門家を持っていたほうがいだろうと考え、お一人を客員解説委員の形で招き、何かあればテレビ出演していただいたり、勉強会での講師をお願いしたりした。その流れでずっとやってきましたが、福島原発事故の時はいもう、[その方は] 毎日放送の対応をしていましたから、改めて手当たり次第に専門家に電話をし、出演をお願いしました。

—— アドバイザーが推進派か反対派かで、局の全体の論調が全然違ってくる。影響力がすごく大きい。この事故をきっかけに、原発にブレーキをかけるほうに取材を手厚くするといった配慮は？

箕輪 そこはやっぱりバランスでしょうね。どちらかに偏るんじゃないで。両方取材を見に行く。

—— 原子力資料情報室などの市民団体と、報道局との関係は、これまではほとんど見えなかったが？

箕輪 ほとんど希薄でした。今も正直なところ、そんなに強くはないですよ。ただ地方局の中には密接な関係を持っている記者がいたりするので、そのあたりの情報は共有化しています。

—— 専門チームとして原発反対の人たちを呼んで話を聞くことも？

箕輪 今のところはやっていません。今度は東電の方に来ていただいて話を聞くことになっているようです。1回目が環境省の方に来ていただいて除染の実態について話をしてもらいました。取材に行く連中が福島県内どうなってるか知らないといやだろうと思ってですね、2回目は東電の方に来ていただく予定です今どうなっているのか、今後はどうなると予想できるのか、それは最大の関心事だし、きちんと把握をしていることが取材をする上で必要なことだと思っています。

—— マニュアル改訂はいつ頃までにと考えているか。

箕輪 今回の福島動きを見ながら別なものを、改定よりも新しいものを作るっていう形になると思います。

箕輪 まったく想定していない事故でしたからね、こういう事故っていうのは。

—— 東電は商業メディアのスポンサーとして大口客だが、東電との関係は現時点でどうなっているのか。

箕輪 事故の後はないと思います。

—— 時期を見てというような打診も無い？

箕輪 何もないです。私は、30年ずっとこの報道にいますけど、スポンサーを意識してニュースを流したことはないですよ。意識したら何もできなくなってしまうし、報道機関としてのあるべき姿に忠実であるだけです。

—— 編成局長と報道局長との会議などのレベルでは？

箕輪 ないです、ないです。本当はないですよ。本当に。

—— 原発事故では報道がなまぬるかかったとか、知りたい情報が得られなかったという批判がある。マスメディアの影響力は強いから「人々を恐怖に陥らせてはいけない」というバランスも働くとおもいますが、報道局長としてあのような災害において、どのぐらいの報道をすべきか、という考えはあるか。

箕輪 今思い返すと、爆発事故があった時はCMなしで放送していました。私が指示したのは、「東電だろうが政府だろうが、会見はじっくり聞かせろ」と言ったんですよ。つまり、普通、テレビというのは時間を気にしてずばずばと切りたがるんですけども、きっと国民は、今何が起きているのか、東電は政府は何を考えているのかっていうことを自分の耳で聞き目で見、それをもとに頭の中で判断したいはずだと思います。だから、我々はそれをちゃんと流すのが仕事のはずだと言って、会見は最初から最後まで中断せずに放送しました。

—— 先ほど「40キロ圏外へ避難」の際に、自分たちメディアの人間がそこにいることで誤ったメッセージを伝えてしまいかねない、との話が出たが、ならば「避難しよう」とテレビを通じて出す、つまり「我々（フジテレビ）は局員を避難させた、住民も避難すべきだ」というメッセージを出すところまでの判断には踏み込まなかったのか。

箕輪 踏み込めなかったです。結局、私が「40キロ [圏外へ] 出ろ」と言った根拠は、あの [原子炉が] 吹っ飛んだ映像を見た [ということ] だけですだからね。それがどういうものを意味しているのかは分からない。瞬間的にすべての神経を集中させて出した判断ですから、その後のデータがどうなっているか、など原発の状況が分からない以上は、そこまでは踏み込めませんでした。

—— そうすると、「ある程度配慮をする報道」という、やはり住民を根拠なく不安に陥れてはいけない、という判断が？

箕輪 きっともしかしたら根底にあったかもしれないですね。ただ、避難しろという判断は、僕は行政当局がすべきだと思うんですよ。あらゆるデータを持っているんですから。我々と比べて、彼らは多くのデータを持っていて判断できるんですから、彼らがすべきであって、僕らが言うには根拠がなさすぎると思います。もし、避難する必要がない状況だったら、不安を煽ると批判されたことでしょう。我々だって、データがあればやりますよ。でもあの時点で、正直言ってデータは何もなかったです。[スタジオに] 呼んだゲストも、判断できなかったと思います。

—— ゲストとは？

箕輪 大学の先生です。推進派とか反対派とかいうレッテルよりも、政府や東電が開示したデータに謙虚に向き合ってほしいと思っていました。だからこそ、政府はデータなどの情報を開示すべきだと

思うんですよ。開示して初めてプロの専門家が判断できるわけですから。だから、あの時点でテレビ局にそこまで求められても、正直言って、無理だったと思いますね。ただ、推測だけでは報道の役割を果たすことはできないと思います。推測にしても、それを根拠づけるデータは必要です。だからこそ、何度も言いますが、国がもっともっとデータを開示すべき必要があると思っています。国民に情報を提供しても混乱を招くだけだとも思っていたとしたら、不遜な考えだと思います。もっと国民を信頼すべきだとも思います。

—— SPEED I（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）情報の開示については局内で相当論議になったか。「なぜ開示しないんだ」という声は上がっていた？

箕輪 そうですよ。忘れちゃったんですけども、きっとあったと思いますよ。もう一度体制を組み直して取材に行くにしても、どこが比較的安全なのかはどうしても知りたい情報でしたから。

—— [記憶に残るほどには] 論議されてはいない？

箕輪 ないですね。もしかしたら、省庁のクラブであったかもしれないです。ただ、それがこっちには上がって来てなかった。それよりも、今起きていることを放送することに専念していたし、政府が言う“想定外”という言葉信じ、政府もわかっていないのだろうと勝手に思い込んでいたところがありました。それが突っ込み不足になった理由かもしれません。

—— 東京から全避難となりかねないレベルのインパクト。当時、ある程度抑制して報道をしていた社もあったと聞く。最悪の事態をどこまで当時想定していたか。想定根拠のデータが無い中ではもうスペキュレーション [推測] にならざるをえないが、どなた [何] に依拠したか、またその依拠の理由は何だったか。

箕輪 それは正直なところ、政府・東電の会見を聞いて、私が判断したとしか言いようがないですよ。ニュースの責任者が私なので、私の判断です。記者の勘という笑われるかもしれませんが、それだけの経験は積んでいると思っています。

—— つぎに原発事故が起きた時のために、そのときに判断するために判断を仰ぐ専門家の人材プールも作っているが、必要なことは……？

箕輪 今思えば我々がもっと政府に対して情報開示を求めるべきでした。

—— 災害の状況や避難についての情報を政府に求める——まずは社員の安全のために情報を取る、ということについてのマニュアル化、あるいは何らかの整理は進んでいるか。

箕輪 いや、進んでません。

—— そこまでは手におえない？

箕輪 当時と比べれば、今はもう平時になってきましたから、そういう段階で次に起きた時にどうするかということは、いろんな人と話して、やっぱりきちんとした情報開示しかないだろうと思っています。それで初めて逃げるとか逃げないか判断できるんだから。福島第一原発事故の際の対応の失敗は当然政府だって認識してると思うんですよ。我々が言うことはそれしかないかなって。かりに情報開示されない場合でもそういうディープな情報を取材することができ、それが確かだという確信がもてるまでにウラがとれたとしたらきっとそれを放送すると思います。あのときは「東京も危ないぞ」

っていう情報が「仮に」あったとしても、放送するだけの確信をもてるウラがとれなかった。

—— 当時の編集局には「そこまでやりましょう」という意見は？

箕輪 無かったです。

—— 震災から3年経って、改めて検証して、「もう少しこういう判断ができたな」とか「50キロ [圏外避難] にしておけばよかったな」とか、「30キロ圏でよかったな」と考える点はあるか。

箕輪 結果的に言うと、風向き考えて [考えてみれば] 40にしてよかったなと思いますよ。風が無ければきっと 20 でいいんでしょうけど。あのときの風向きとか、わかかっていませんでしたけど、自分がJCO事故を現場で取材したときの感覚、それが判断の根底にありました。

—— 箕輪さんが取材されていた？

箕輪 現場キャップをしていました。今でも覚えてるんですけど、急に雨が強く降ってきて、JCOの会社の前から中継ができなくなったので役場に移動しました。そこで夜の9時ぐらいだったかな、官房長官の記者会見がテレビで放送されていて「いま東海村で起きてるのは、これまで日本で起きたことがないような大変な事態だ」という趣旨の話をしている。みんな聞いてて、部屋中がしーんとなったことを覚えています。「これ、やばいのかな」っていう。

—— ご自身、被爆の影響が大きい年齢だった？

箕輪 そうですね。「裸の原子炉」なんて言われたら「はあ!?!」と思いましたよ、それは。当時社会部のデスクだったんですけど、茨城県出身ということもあって部長から現場キャップ行けって言われました。まあ、土地勘とかはあったんですけども。ただあれはびっくりしましたね、正直なところ。

—— その肌身の感覚が3・11の原発事故に対する判断の速さにつながっている？

箕輪 そうですね「やばい」っていうのがそれですよ。いま起きていることは我々の想定を超えている。だから40キロ離れるという言葉になったのだと思います。若い人に対しては「最後は動物になれ」っていうんです。我々人間が動物的な感覚で、やばいかどうか判断しろと。やばいと思ったらそれを信用しろと。

—— それは研修の際に伝えているのか？

箕輪 若手の記者研修って毎年やってるんですけど、そこで私が話す機会があるのでそうした話をしています。経験則に基づく勘というものを大事にしてほしいと思っています。

—— 入社何年目ぐらいの社員が対象か。

箕輪 3～4年目。

—— 研修項目には、災害取材のついても含む？

箕輪 3・11の翌年は、福島テレビの人たちに来てもらって、そういう話をしてもらいました。今はだから、逆に「福島テレビに順番に行く」じゃないですか。あの当時と比べれば時間があるので夜はみんなで一緒に酒飲んで、その席で当時の話を聞いたりして、他人の経験から何を得てもらえればと思っています。

—— フジテレビからは現在も順番に [交代で] 福島テレビに行って [報道の応援をして] いる？ 何人ぐらいか？

箕輪 行ってます。ワンクルーですから、3人か4人。

— 期間的には？

箕輪 期間的には、うちは他の番組から行くクルーも多いですから——どれぐらい行ってるんだろう、1回行ったら1週間。

— 福島テレビの報道局は局員20人ぐらいか？

箕輪 えーと、いても30人ぐらいですね。

— フジテレビからのスタッフは具体的には何を担当するのか。

箕輪 結局、福島テレビの配下になって、報道局員と同じように、指揮下に入って取材をする。

— ローカルだけでなく、全国として。福島からの全国ニュースが増えたわけだから、そういうふうにして、その方たちがニュースを製作するっていう。

箕輪 それから、地方局の人が応援に行った場合には、自分たちが取材したものを自分のとこのローカルニュースで流してもいいよと言ったんですよ。

— 全中 [全国放送] だけでなく、ローカル部分 [ローカル放送] も。

箕輪 はい。その地方ごとに課題が見つかるかもしれないし、東日本大震災を他人事と思わないように、それと風化を防ぐためにも。

— 原発の問題に限らず、地元で起きている一般ニュースも担当する？

箕輪 ことも、それは期間一週間だったら。

— 例えば交通事故の取材も。

箕輪 それは今 [インタビュー当時] はやっていないです。今は原発しかやっていない。もし地元の交通事故を取材したいと思ったら、応援の一週間の期限が切れて、次の人にバトンタッチしてから2日ぐらい休みもらってやれと [有給休暇を使って自主的に取材してこいと]。

— 「発生もの」 [原発震災以外の突発で起きる事件や事故の取材] で差し向けられることはない。

箕輪 絶対ないです。

— 応援に行くのは福島へだけか。例えば仙台は？

箕輪 仙台と盛岡は、うちの系列の基金でお金を出して、支局を設けました。人的な応援ではなく金銭的な面でも応援態勢をつくりました。

— その支局と現地のテレビとの関係は。

箕輪 これはもう完全に、現地のテレビ局の支配下で。

— 支局には常駐局員がいるのか？

箕輪 そうです。結局、現地のテレビ局は新しく支局を作るとなると費用面で厳しいところがある。それはうちのFNNの基金で面倒を見ようと。

— 何人規模の？

箕輪 一つの支局で、カメラマンと記者と2人ですね。4~5か所作ってますから、海沿いに。

— 震災から3年経って、震災報道の価値、フジテレビにおけるニュースプライオリティはどう変化しているか。

箕輪 これはね、報道局長としての私の意地ですよ。阪神淡路大震災のときも現場応援に行ったのですが1か月で東京に戻された。なぜ1か月で返されたかっていうと、オウム真理教事件がはじけそうになったからですよ。当時社会部のデスクですから。「お前、帰ってきてオウムの面倒見ろ」と言われて、それから東京はオウム一色になりました。もうご存知ですよ、あの頃、東京の報道は阪神大震災を忘れたんですよ。それがやっぱり自分の中でちょっと悔いとしてね、ずっと残ってたわけですね。で、今自分が局長としてニュースを差配できるようになったので、指示したことはまず一つあって、うちの昼のニュースから、被災地のニュースを必ず毎日出せと。

ですから、3・11以降、今でも続いているわけです。被災地のニュース。それと、この1月からやったのは、先ほど言った温度差の問題があるので。3月11日の特番っていうのは、視聴率をみると、被災地から遠くなるほど悪くなっていくんですよ。この差を埋めるためには、命を守るっていう視点で考えていかなければならない。つまり、どこでも災害が起きるんだと。それで、1月から、週にいっぱいなんですけど、昼のニュースで「いのちを守る」という防災企画を始めました。たまたま今日なんですよ。これですね。全国にどんなテーマでも扱って良いことにしました。つまり、地震・津波だけじゃなくって、雪害、大雪の回だってあるだろう、大雨の回だってあるだろう。富士山の土石流を想定したり。全国の系列局に企画をあげてもらって、東京と連携して、これは週にいっぱい必ず放送をしていくことにしました

—— その時間帯には、系列全部で同じ番組が。

箕輪 ええ。流れます。全国枠ですから。テーマは「いのちを守る」。災害のために何かしなきゃいけないんだけど、何をしていたかわからない人が3割くらいいるとかっていう何かの調査結果を新聞で知りました。だったら、「何をすればいいんだ」ということを提示するのが、我々メディアの責任じゃないかなと思って始めました。

—— 何分間か。

箕輪 これは、毎回違うのですが、今回は3分25秒ですね。今回は他に大きなニュースがあったのでこの時間になりましたが、平穏なときだったらもう少し時間を延ばします

—— 30分のテレビニュースのうちの3分は大きい。

箕輪 これは長いと思います

—— じっくり見るというより、立ったり座ったりしている視聴者が多い時間帯で見てもらうには3分は結構長い。

—— 災害報道や防災番組はNHKがやればいいじゃないか、フジテレビは面白いほうがいい、というような思い込みが一般にはあるようだが。

箕輪 フジテレビでもいろいろな考えをしている人がいる。それがエネルギーになっているのだと思います。

—— 方針をめぐっての攻防もあるのか。

箕輪 それは、外からは言ってこない。それはやっぱり編集権の介入になりますから。それはよその部局からは言ってこないです。

—— その枠を確保するのは、箕輪さんの力次第なのか。

箕輪 うちの連中は、「今の局長は災害報道に熱心だ」と思っている。社会部あがりですから。この「命を守る」企画も、最初はみんな、2週間にいっぺんぐらいでいいかなと思ったらしいんですよ。それが一週間にいっぺんとか言われて驚いた。しかも出来がよかろうが悪かろうが関係ない、それよりもやることに意義があるんだと言われて面食らったと思います。出来が悪いものを放送するのは抵抗があるから必ず一生懸命やりますよ。以前、東京の木造密集地域を扱ったことがあります。本来なら「東京のことで地方では関係ない」という批判があるかと思ったら、それはなかった。地元でそうした場所がないかを見直すきっかけになったようです。

—— 南海トラフ巨大地震への警告があれだけ出てるから、西日本の局でも以前よりは取り組みが本気に……？

箕輪 そうです。だから、高知なんか結構意識レベルが高いですよ。記者が育っているような気がします。それによって地域の防災意識が高まれば、企画を始めた意味があると思います。少なくとも[と]も、現段階では地方局からは支持されています。「原発取材チーム作ります」なんて言っても、地方局から批判はありませんでした。これがフジ系列の良さかなとも思いました。うちの系列全体で、やっぱりこれをやらなきゃいけないよね、っていう問題意識がある。それと、関西テレビといま仲がいいんですよ。関西テレビは、うちの系列で2番目に強い局ですから。ほかの小さい局から見ると、東京と大阪が仲がいいっていうのは、異様なんですよね。

あと、名古屋の東海テレビも平場の会議で、「箕輪さんがやっている方針を東海テレビとしては支持します」って言っていたら、で、非常に系列全体がまとまっていると印象があります。有難い限りです。

—— 「被災地と寄り添う」というテーマもある。東北の人へ目を向けさせる報道を、みんなやっているといるんだけど、なかなか実行できない。どちらかと言うと地味なネタなので、情報源を増やしたり、実力のあるディレクターや記者を現地に投入して、緻密なストーリーを送り出さないと、視聴者は振り向かない。他方で、現地に送られる記者は一、二年目の若手をトレーニングのために行かせることもある。そこをどのようにマネジメントしているか。

箕輪 それは、報道[局]ができないところを情報番組でカバーしてもらってる。例えば、ドキュメンタリーを情報制作[局]としてやってますから。それから、「わ・す・れ・な・い」という特番も情報制作。ただ、彼らが取材に行ったときには、うちの系列の報道局がすべてバックアップして支援をするという体制を作ってますので、我々ができないところを彼らにカバーしてもらっているという部分があります。

—— 情報番組には芸能人が出てきて「お涙ちょうだい」みたいな演出もあり、それなりに訴求力がある。「涙」も視聴者にとって重要な部分だが——報道とのバランスについては報道局長として何か考えは？

箕輪 それは、この30年の間に情報番組が変わったなと思いましたよ。硬派のネタをきちんと扱うようになった。僕はある時期、自分が局長になる前のころは、情報番組のほうが報道らしいことやっ

てるんじゃないかと思ってました。報道が逆にエンターテインメントに傾斜しているという感じを受けたことがありました。だから今やっぱり、情報番組で「わ・す・れ・な・い」シリーズっていうのを、東日本大震災に関連してやってるんですけど、あれが作れるっていうのは、そういう彼ら自身の真面目さっていうのがあるからできるのと、うちの系列の報道局が情報制作局の人たちをよそ者として見ないで自分たちの仲間として一緒に仕事してるから、ああいう良い番組ができてるのかなと思います。報道と情報の間では、ずいぶん垣根が低くなっています。

—— 社内横断的な取り組みも？

箕輪 やってます。春の「みちのく合衆国」を2012年、13年、14年、と3年間やって一区切りをつけました。あとは「めざましライブ」っていう、「めざましテレビ」のタイトルをつけたライブを被災地で行ったりしています。

—— イベントの主催もするのか。

箕輪 イベントですと一つになりやすい面があります。

—— 例えばクルーを共有しつつ、報道と情報から別の切り口で取り上げる、という形の連携は？

箕輪 そうですね、それはきっとそういうことでもやらないと、3・11特番は見てくれる人がいなくなるなと思います。3・11周辺に報道でも特番を作る、情報でも特番を作るって今はやってきてるわけですね。ところが、3・11当日の視聴率は、東京ではあまり芳しいものとはいえない。どこの局もそうだと思いますけど。そこで今、情報制作局が作ってる、人が見たいと思わせるような要素っていうのを入れていかないと、なんのための災害報道か分からなくなってしまうと思いますよね。単にアリバイ証明で放送しているだけになってしまう。

—— 見てもらえないと意味が無い。

箕輪 意味が無いと思いますよね。

—— 復興報道は「こんなに復興した」というものと、「まだこれだけしか復興していない」という、この二つの視点のバランスも難しい。

箕輪 うち 기본적으로「まだ」っていう言葉のほうが多いと思います、うちのニュースは。さっき言った海沿いの支局の人というのは、自分もその住人ですから、やっぱり肌で感じているんですよね、進んでいない実態というのを。ですから、そういうリポートが上がってくるケースが多いと思います。被災者の実感に近いものがそこにはあると思います。

—— 他のキー局の報道は意識するか。同じ内容を扱いつつ、ほかの切り口を探したり、「あっちはあんなふうに復興を扱ってるから、うちはどうしよう」とか。

箕輪 それは気になりますよね。やっぱり見てて、いい企画作ってるなあと思えば、なんでうちでできないんだよ、と文句言いますもんね。

—— 局長として多局の番組もモニターしている？

箕輪 そういうのに限って目に入ってしまうと言ったほうがいいんでしょうね、きっとね。

—— 視聴率はなかなか取れない？

箕輪 やっぱね、時の流れは怖いものがある。首都直下地震への懸念が言われていますが、東日本

大震災に対する温度差はものすごくあると思います。

—— 「震災報道」はいつまで続ける、とお考えか。

箕輪 少なくとも、いつまでと決めないことが大事だと思っています。続けていくっていうことが大切だと。

—— 震災報道に関する研究会や、記者の中での「どういうアングルを作るか」といった話し合いの場はあるか。

箕輪 そうですね。先ほど言った記者研修を、全国で始めたカリキュラムの中に一つ入れるぐらいで、それだけ特化してやるってことはありません。でも年にいっぺん、うちは防災会議っていうのを、系列のデスクとか記者を集めて行っています。これは自然災害のあった現場を実際に視察してどういう状態だったかを皆で見て、それから地元局の担当者に話を聞くものです。ここのところずっと東日本になりましたけど、阪神大震災があった翌年には三宮に行ったり、中越地震のときには新潟に行ったりしました。

—— 東日本大震災を経験して、全社的な総括や改善点などは？

箕輪 一つはさっき申し上げた新宿支局。ここ [お台場の本社] が被災したことを想定して新宿支局を作りました。社長以下幹部も会議できるようなスペースもあるんですよ。報道だけじゃなく。会社全体が新宿に移って、関西テレビから電波をだそうという意識が変わったことと、あとは防災訓練もより実践的になったと思います。昔はスタジオでやってたんですよ。9月1日の会議を。でも東日本大震災で知ったことは、スタジオでやったら上から照明が落ちてくる恐れがあるというので、そうじゃない場所で社長主催の会議を行っています。

—— BCP（事業継続計画）とは、どういう連携をとっているか。

箕輪 社長の指示をうけて、「今フジテレビにとって必要なものは何か」を検討し、それにいくらかの費用が掛かるかを見積りして、提出しています。新宿支局の強化もこの流れの中で実行に移されたものです。

—— 総括の結果として「ここはだめだった」という反省点は？

箕輪 やっぱり「原発の専門記者を作らなきゃいけなかった」という点ですね。つまり、学者さんの見方と記者の見方というのはきっと違うと思うんです。やっぱり記者であれば違う見方で解説もできた。例えば、僕が解説委員やっていたときに、ある問題で賛成の人が出たら、私はわざと反対の立場で画面に出るわけですよ。それで、中立公平な放送ができるわけです。ゲストが推進派の方で、安全を過度に強調するのであれば、「そうじゃない」ということを言うのも仕事であると。でもそれが、記者であれば放送法でどこまで許されるか、ということもわかってるはずですから、過度に一方に傾斜することもない。専門の記者を作るべきだったという思いが強くなります。それが、今度の取材チームの中で人が育ち実現できればと思っています。

—— 後継者の育成という点では、今後、災害にも柔軟に対応できる報道局長が必要。どのように人材育成を？

箕輪 これはね、きっと背中を見て「ああいうふうにやろうかな」と思ってもらえないんじゃないかな

いですか。リーダーの責任というのは、育てようと思って育つものでもないし。やっぱり現場を知らないとだめですよ、報道局長は。テレビ局って、私、初めての現場上がりの局長だったわけですが、現場で教えてもらったことが役立っています。[評価基準の] 尺度として——テレ朝さんはわからないけど、うちは番組派 [制作局] のほうが [報道局よりも] 強かった。つまり、視聴率の高い番組の編集長とかやれば、当然スクープよりもわかりやすいじゃないですか。

—— つまり報道局長でも記者出身でもないほうが……？

箕輪 昔は記者やって、その番組のディレクターやってプロデューサーやって編集長やりましたというほうが、数字 [視聴率] という——

—— 社内調整に長けている、と。

箕輪 私はついこの間まで解説委員やってまして、その前は社会部に 20 年在籍していました。広い視野からモノを見るという点では、私よりもいろいろな職場を経た人の方が適任なのかもしれませんが、3・11 のようなときは個人的には報道の現場が長い人の方が適任ではないかと思います。

—— テレビ局には [新聞社にくらべて] 記者が記者のキャリアを継続せずに営業に異動になる例もあるようだが。

箕輪 地方局は多いですね。うちは結構報道って長いです。ただやっぱり、デスクやったりとかしますから、現場からちょっと疎遠になったりするんですけど。私それが嫌で、社会部長一年で辞めさせてもらって、解説委員にしてもらって現場やりましたから。現場が好きだったんです。

—— フジテレビはいち早く局員の手記を集めた文集を作った。[災害時対応の] 仕組みや連絡体制の話から、被災者に寄り添うことに失敗した経験などが含まれている。そういう情報を整理をして現場の記者や報道局のリーダーに教訓として残し保存していくというような作業が必要ではないか。そのテーマで会議をもつとか、専従をつけて担当させるなどのアイデアはおありか。

箕輪 情報量の多い分厚いのを作って、それをまず皆に読んでほしいなというのが一つあったですよ。そのあとやっぱり、おっしゃるようなものを作らなきゃいけないんだろうけど、そこまで手が回っていないというのが正直なところ。むしろこういう企画、新しいのをどんどんやっていくほうに目が行っちゃって、振り返らうっていう感じが無いですね。もしかしたら報道局長離れて、報道担当役員だけだったら時間ができるからそういうことも頭に浮かぶのかもしれないけど、結局いまは先頭を切って走っているんで、自分自身に余裕が無いんです、正直なところ。

—— ファースト・プライオリティは「原発記者」の育成か。

箕輪 うん、そういうことです。

—— 次に必要なことは？

箕輪 そうねえ……。記者で言えばですよ、原点に帰るんだけど、人の心の痛みをわかる記者を要請するために、現場を何度でも踏ませるしかない。現場に記者を行かせて、そこで何かを感じ取らせるっていうことが、きっと僕の仕事だろうと思います。

—— 現場取材のあり方に問題を感じるような記者も？

箕輪 いますよ。

—— 口に出して指摘したか。

箕輪 出しますよ。オンエア見た瞬間に怒鳴り散らしますからね。周囲は迷惑していることと思います。ただ、なぜ怒っているのかについては、ちゃんとわかってほしいと思います。記者が独りよがりにならないためにも。

—— そういう記者に対する教育としては？

箕輪 結局その都度見て、自分が思ったことを口に出して言って、どうすればよかったのか、こうすればよかったんじゃないかということを上司や周囲の先輩たちが言うことしかないかなと思ってます。先ほども言いましたが、私は結構怒りますから、嫌われてると思いますよ、現場からは。こんな細かいことまで局長が言うのかって。でもそれを言わないと、恥を書くのは記者自身なんです。そしてフジテレビも。

—— 専門記者の育成の話も出たが、記者の実務、もしくは倫理の面で、何が課題と考えるか。

箕輪 きっと、いまうちの会社に入ってくる若い子たちっていうのは、恵まれて育ってるんですよ。大学行くのは当たり前。世の中、そうじゃない人が山ほどいるんだっていうことを、どうやったら彼らに教えられるか。僕は、警視庁記者だったころ、著名な県立高校を出て警察入った幹部の方に対して、不用意に、「どうして大学行かなかったんですか」とバカな質問をしたことがあります。失礼なことをしたと反省しています。そうしたら、彼は、「農家の二男坊、三男坊は大学行けないんだよ」と。「じゃあ、なんで警視庁来たんですか」って聞いたら、彼は言いました。高校に1枚ポスターが貼ってあった。「働きながら大学に行ける」と書いてあって。警視庁に行けば勉強できるんだ、と思って入ってきた。正直、心がうたれたというか、自分の甘さを知った瞬間でした。

そういう経験をうちの若い連中にもしてもらいたいし、できなければ指導していくことが私の責任だと思っています。きっと考え方が変わってくじゃないですか、そういう人と出会っていけば。そういう人との出会いとかいう場面というのは、彼ら自分だけで作るのは難しいでしょうから、お願いして若手の前で話をしてもらって機会をつくっています。そうすれば、彼らが何かを感じ取りこれまでとは違う記者に成長できると思います。きっと人の心の痛みがわかるような記者に。そうすると、そういうのがインタビューしても現場へ行っても視点が違うと思うんですよ。

—— それは今後の震災報道、継続性のある震災報道にもつながるか。

箕輪 休みがあったら現地行けと話しています。夏休みでも春休みでもいいから、いろんな人と会って飯食って酒飲んで現地見て来いと。それだったら夏休みを延長してやる。きっとそういう中で何かつかむと思うんですよ、本当にちゃんとやる気があれば、やっぱりテレビって新聞と違って現場に行く機会が少ないと思うんですよ。新聞記者は支局に行つて、それからずっとじゃないですか。テレビは人数少ないこともあって、現場に行く機会が多いのはカメラマンですよ。カメラマンは必ず映像を撮るから。私は入社した最初2年間はカメラマンだったんです。一般職で入ったんですけども。そのとき教えられましたものが、今役立っています。だから今年の新入社員も、一般職なんですけどカメラに配属しました。それを継続的にやっていこうかなと思ってんですよ。

3・11のときは、確かニコニコ動画でフジテレビの放送を流してもらいました。その理由というの

は多くの人に現状を把握してもらうためには、テレビ以外の手段を使うことが必要だと考えたからです。

—— フジテレビのほかに、NHKがニコニコ動画と組んで「クローズアップ現代」を1回だけオンラインで放送し、スピンオフ [番組] も作った。フジテレビはその後の連携は？

箕輪 報道 [局] としてはやってないです。でも、ほかがきっと。

植村 情報 [制作局] とか何かでやってますね。

—— 反対にテレビの送受信設備を使わずにインターネット配信で映像を流せるような、ハードの設備面での連携や共有などは検討しているか？

箕輪 そこまではまだ考えていません。

植村 そうですね。あと自社の体系のシステムとか関係していますので、そのあたりまで具体的に話せるかどうか。

箕輪 むしろ自分のところ強靱化のほうを進める必要があると思っています。あと視聴者がスマホで撮った映像をすぐに送ってもらうようなアプリを作りました。それと産経新聞の記者の方にも、同様にアプリを使って送ってほしいとお願いしています。

—— それは震災後に始まった取り組みか？

箕輪 今年からです。産経の編集担当役員と話をしていて、一緒にできるものはないかとあれこれ言っているなかで浮かんだものです。彼が編集局長で来た時に、僕は報道局長と一緒に。その時からずっと仲良くしてもらって。

—— 産経 [新聞] と一緒に立ち上げるビデオポストには、一般市民も投稿が可能か？

箕輪 できるし、産経の支局の記者にスマホで撮った映像をそれを使って送ったり。

—— 今後、記者に動画作成や投稿のノウハウをコーチをする？

箕輪 うちの撮影部でDVD作れって言ったんですよ、撮影の仕方の。そもそもスマホは縦じゃなくて横に撮るんだとかね。テレビ画面に合わせると。それを [そうしたマニュアル的な] DVDを作って、産経の全部の支局に配ろうと。

—— ウェブの他に、現地のローカルTVやコミュニティメディア、もしくは現地の市民団体との連携も？

箕輪 これはもう完全に現地の放送局に任せています。ただ、さっき支局を新たに作ったっていう話をしましたが、仙台放送の支局の記者がドキュメンタリーを作ったんですが、その作品がFNSドキュメンタリー大賞をとったんですね。彼らは地元に着して——ローカルニュースで何本も何本も企画を作りながら、一つのドキュメンタリーに仕上げたんです。それから地元局のローカルニュースを、FNNのホームページから見るようにしました。

植村 たぶん、被災で県を移られてる人とか、自分の地元のニュースが見られなかったりするんで。

—— 風評被害の問題については？

箕輪 風評被害は、やっぱり茨城のJCOのときにすごく感じましたよね。そうじゃないんだってことは、ニュースの中でやっていくしかないと思いますよ。今回も、茨城県の農家の人間に話を聞いて

風評被害で参っているということを放送しました。

—— 東京に住み小さな子どもを持つ主婦として「食べさせたくない」という声もある中で、どうバランスを考えるのか。

箕輪 もうこれは心理的な面ですから。でも数字的に「大丈夫なんだよ」っていうニュースを流していくしかないんだと思いますよ。それでだんだん客観的に考えていただければ、僕はいいんだと思います。

—— 政府との関係は？ [災害] 対策本部や復興庁との距離感はどうあるべきと考えるか。

箕輪 それはかなり俗人的な問題になっちゃいますよね。取材の中で、この人だったら話してくれるけれどもよそはだめだというのがあるので。組織としては、きっと平行線になると思いますよ。その中でどうやって俗人的に情報をとれるようなところを作っていくかということじゃないかと思うんですよ。次はもっといい報道をしようというのが、みんなの思いですからね。

—— 本当に今日はたくさんありがとうございました。

〈了〉